

牛馬をいたわる話（須磨区一の谷町）

「ずっとむかし、須磨の村人はなあ、三月になったら山へ牛をはなしがいにしたそうや。とお（十才）から十五の子が牛一匹ずつひいて、東のノツタリ山、西のゼンゴ山と別れて登ってった。このふたつの山は、草がおおうて、ヤセ牛がえらい（たいへん）太って帰ってくるんや。日本人いうのんはご先祖〈せんぞ〉さん大事にするだけやおて、牛や馬もたいせつにしたもんやそうな。須磨ではなあ、年とって動けんようになった牛や馬や、けがした牛や馬を、村の共有地のはらっぱにはなして養〈やし〉のおたそおや。今の須磨浦公園の北の方やと。牛も馬も人間のために、血の汗ながして働いたんやから、弱ったやつは助けたらんならん、いうてな。お上にも、そのことを願い出て許されたので、番人をおいてなア。寿命〈じゅみょう〉がきて静かに死んでいくまで、めんどお見たるんや。

それでも、エサがようけ（たくさん）いるのでな、世間の人から寄付〈きふ〉してもらうんや。いろんな人から豆やぬかがめぐまれたけど、それでも足らん。それで世話人〈せわにん〉らが考えて、広告を刷〈す〉ったんや。年よった牛馬のために毎日ひとにぎりの米を寄付してやったら、家族の人がじょうぶになって、商売繁昌〈はんじょう〉する、いうてなあ。ことに、うしどし生まれの人と、うまどしの人、寄付したら一生、病気にならへん、いわれたもんや。それでも病気がおもなったり年をとって死んでしもた牛や馬には、ぼんさん（僧侶）よんで、お経あげてやるし、春と秋には、りっぱなおひがんの供養〈くよう〉もしてやったそうな。」

（『西摂大観』）

